

論文

脱会プロセスとその後 —もののみの塔聖書冊子協会の脱会者を事例に

猪瀬優理

論文要旨

本稿は、これまであまり研究課題として取り上げられてこなかった宗教集団からの脱会について、もののみの塔聖書冊子協会からの脱会者 39 名を事例として分析した実証的研究である。特に本稿では、当教団の信者を親にもつ二世信者の脱会にみられる問題に焦点を当てている。本稿では、当教団が、**信者にとって脱会が多くの困難や抵抗を生じさせる特徴を持つ教団であると考え**る。脱会の問題を考える手がかりとして、本稿では組織的離脱と認知的離脱が生じるプロセス、また脱会後に必要となる「社会的リアリティの再定義」の達成に焦点を当てる。このとき、認知的離脱と「社会的リアリティの再定義」の要件として、教団外情報の入手と教団外との人間関係の形成に着目して分析した。事例分析の結果として、一世信者と二世信者ではそれぞれ必要とされる情報や人間関係の性質が異なっていることが示された。

キーワード

脱会／二世信者／組織的離脱と認知的離脱／社会的リアリティの再定義
／もののみの塔聖書冊子協会

1. 問題の所在

1.1 「脱会」する上で困難・抵抗の多い宗教集団

1970 年代から 1980 年代の間、教団へ入信するプロセスや条件に焦点を当てた研究が多数出されたが、相対的に教団からの脱会に関する研究は少なかった⁽¹⁾。殊に、日本には「脱会」に関する実証的研究はない。本稿は、もののみの塔聖書冊子協会(以下、「協会」と略す)からの脱会者 39 名を事例として分析した「脱会」に関する実証研究である。その中でも特に、「協

会」の信者を親に持つ二世信者の「脱会」にみられる問題に焦点を当てる。

欧米の「脱会」研究は一般に「カルト」などと呼ばれる教団を対象としている。これらの中には、信者が家族とのつながりを断つなど、問題となる行動を起こすところも少なくない。つまり、「脱会」が研究課題となるような教団は、一般社会に受け入れられていないことがその理由となっているのである。しかし、このような研究理由は価値判断を含んでいるため適切ではなく、また、一般社会の側からの見方を重視しすぎていて、「脱会」しようとする信者側の問題が考慮されていない。信者側からみて「脱会」する上で大きな困難や抵抗が生じるような教団の特徴を考える必要がある。

本稿では、「教団から離れたら不幸になる」などの脅迫を含む教理や、「脱会者との会話の禁止」などの教団側から関係を断つ組織的構造にこの特徴をみる。このような特徴を持った教団の場合、信者が離脱の意志を持っても、**教理への恐怖や人間関係を失う恐れなどから簡単には「脱会」できないのである。**

この特徴の上に、教団の教理や行動様式と一般社会との価値観の相違が大きいという特徴が加わった場合、「脱会」の実行やその後の状況は、教団とは異なった社会に新たに参入しなければならないため、さらに困難になる。すべての教団がこのような構造を持っているわけではない。特に日本においては所属が明確でない教団や、一般社会との価値観の相違が大きい教団も多い。入信については数多くの事例研究があるが、脱会についてはあまり関心が向けられてこなかった理由が、これによって説明できる。

本稿で「協会」を事例としてとりあげた理由は、教団の内と外を明確に分け、**メンバーシップを失ったものに対する厳しい制裁が教理・組織の両面で見出されること、なおかつ教理が日本の一般的な価値観と乖離している側面が強いことによる(2章参照)。**また、日本に伝道が開始されてから長い歴史を持ち、多数の二世信者がいることも事例対象とした理由である。

1.2 先行研究の批判的検討と「脱会」の定義

「脱会」を扱った初期の先行研究では、「脱会カウンセリング」等と呼ばれる強制的脱会に関する研究が多数を占めていたが、その後、自発的脱

会者の研究も出てくるようになった。このため、先行研究には自発的脱会者と脱会カウンセリング経験者の違いに関する議論が多い。たとえば、脱会の説明の仕方に関して両者の間で違いがある [Solomon 1981; Wright 1984]、脱会カウンセリング経験者は元の教団に対して否定的評価を持つ側面が強いのに対し、自発的脱会者は元の教団に対して肯定的評価とともに否定的評価も併せ持っている傾向が強い [Wright 1984; Rothbaum 1988]、などの知見がある。これらの研究は、脱会者が「脱会」した後の教団に対する評価や態度の違いに焦点を当てたものと見ることができる。

本稿も「脱会」後の問題に焦点を当てて議論するが、教団への評価については問題の中心としない。脱会者にとっては、それよりも「脱会」後に生じる様々な問題をどのように解決するかが、より重要な課題となるからである。先行研究は、この肝心な問題を十分に取り上げていない。本稿では、このような問題解決に比較的困難が少ない脱会カウンセリング経験者の事例については、参照するにとどめ(3章)、自発的脱会者の事例を詳しく分析する(4章)。

また、先行研究の事例は、ほぼ全員が一世信者、つまり「その教団への入信を自ら選択した人々」である。一世信者についての分析が多い理由は調査対象となった教団の歴史が浅く、二世信者の存在が少なかったからであろう。しかし、「協会」は比較的長い歴史を持つ教団であり、信者の中に二世信者が占める割合も高いと考えられる。本稿では、二世信者を「12歳以下の時に親を信者として持つことで、当教団の教理や組織の影響を大きく受けた人々」とする。二世信者の存在はこれまで着目されてこなかった。これらの二世信者は子どもの頃から「協会」の教理を親からのしつけとして受け入れている。二世信者が「脱会」する上では、どんな困難があるのだろうか。

ここで、「脱会」について定義しておきたい。先行研究[Wright and Ebaugh 1993:119-120]では、「脱会」を、(1)感情的離脱(disaffection):教団の人間関係に愛情不足を感じて感情的に距離を置く状態、(2)認知的離脱(disillusionment):教団の提示する「世界観」に不信を持ち他の代替的な「世界観」を必要とする状態、(3)組織的離脱(disaffiliation):教団の組織的活動への参加を辞めた状態、の三要素に分ける必要性が指摘されている。

これをふまえて、本稿では「脱会」を「一度は教団の教理を受け入れた

人が、教団の教理を認知的に拒否し(認知的離脱)、組織的活動への参加を辞めること(組織的離脱)」と定義する⁽²⁾。感情的離脱については、事例から明確に引き出すことが困難なため、今回は脱会の定義に含めなかった。分析で特に問題としたいのは、組織的離脱と認知的離脱が生じる先後関係が与える影響である。その環境的背景から、二世信者の多くは認知的に離脱できないまま組織的離脱に至ることが多いと考えられる。このことはどのような影響をもたらすだろうか。

1.3 「脱会」後に必要となること―「社会的リアリティの再定義」

脱会プロセスに関する研究では、Wright [1984:176] が、教団内の人間関係の強弱と、信者が教団の教理を受け入れている程度に着目し、自発的脱会を促す4つの条件を提示している。第一に、宗教集団外の社会との結びつきの回復、第二に、教団内で親密な人間関係(対関係)の形成が制限されないこと、第三に、世界を変革できないことを認識すること、第四に、指導者の行動と理念の間の矛盾に気づくことである。また、Jacobs [1989:126-132] もカリスマ的リーダーとの人間関係の強弱に着目し、〔ステージ1〕宗教集団との結びつきの切断、〔ステージ2〕カリスマ的リーダーとの結びつきの切断、〔ステージ3〕運動からの総合的な分離と社会的リアリティの再定義、という3つのステージを設定している。これらの議論は、両方とも教団内外の人間関係の強弱に着目したものであり、特に教団内の人間関係、特に指導者との関係の重要性が確認されている⁽³⁾。

組織から離脱した後に重要になる問題として、Jacobs [1989] が〔ステージ3〕に設定する「社会的リアリティの再定義」に注目すべきである。脱会者が教団から完全に離脱するには、新たな「世界観」を採用する必要がある。その際、**教団の提示する「世界観」を相対化し、社会的リアリティを再定義するための情報が外部から導入される必要がある**。このとき、外部からの人的サポートがあれば、その情報や「世界観」の採用を促進する効果を持つだろう。このため、脱会プロセスの分析においては教団外の人間関係に着目する必要がある。したがって本稿では、教団外から得られる情報や人間関係の状況にも着目しつつ分析を進めたい。

また、本研究のように対象者の語りを事例とする場合には、その語りが「事実」ではなく、常にバイアスが含まれていることを前提としなければ

ならない⁽⁴⁾。しかし、本稿では、脱会後の問題を脱会者がどのように認識しているかを問題とするため、「事実」の確認よりも、脱会者本人が認識している状況についての「語り」そのものを事例対象として分析する。

2. 事例について

2.1 対象者と得られた事例について（表を参照）

本研究の協力者は、以前に何らかの形で「協会」の宗教的活動に参加した経験があり、その後活動を辞め、その教理を信じなくなった人々であり、内訳は、脱会カウンセリング経験者 15 名、自発的脱会者 24 名である。脱会カウンセリング経験者 15 名と自発的脱会者 6 名は脱会カウンセラー等の関係者から紹介され、それ以外の自発的脱会者 18 名はインターネットで形成された元信者のネットワークを通じて紹介された。脱会カウンセリング経験者は 15 名が全員一世信者であり、自発的脱会者のうち一世信者は 7 名、二世信者は 17 名であった。自由面接による一人 1～5 時間ほどのインタビューを行なった。

		一世(22)		二世(17)		小計
		女性	男性	女性	男性	
20 歳代		1	1	3	6	11
30 歳代		4	1	0	4	9
40 歳代		9	0	2	2	13
50 歳代		4	1	0	0	5
60 歳代		1	0	0	0	1
合計		19	3	5	12	39
ネット利用	有－無	6－13	1－2	5－0	12－0	24－15
脱会カウンセリング	有－無	14－5	1－2	0－5	0－12	15－24
組織的脱会の順番	先－後	1－18	2－1	3－2	10－3	16－23
家族信者の存在	有－無	1－18	0－3	4－1	8－4	13－26
精神的疾患の兆候	有－無	1－18	1－2	5－0	8－4	15－24
バプテスマ	有－無	14－5	3－0	1－4	5－7	23－16
キリスト教信仰	有－無	17－2	3－0	0－5	1－11	21－18

表：対象者の属性

2.2 ものみの塔聖書冊子協会の教理と組織活動

1879 年、アメリカ合衆国において成立した。活動信者数は全世界で 590 万人強、日本では約 22 万人である（2001 年現在）。教理は聖書に基づくが、雑誌『ものみの塔』など協会独自の出版物の学習が重要視される。この点に関し、一部のキリスト教会関係者から異議を唱える運動が起こされており、彼らによって脱会カウンセリング活動などが行われている。教理内容には、一部社会問題を引き起こす側面もあり、たびたび話題となる（輸血拒否等）。教理を遵守しようとする傾向が強く、この点に関しては信者の子ども（二世信者）に対しても適用される。活動内容は、週 3 回の「王国会館」の集会への出席、年 3 回の大会参加、伝道奉仕、聖書研究などである。基本的な活動単位は会衆と呼ばれる地域組織であり、会衆には数名の長老と呼ばれる指導的立場の男性がいる。役職はすべて男性のみが就任する。組織構造は、統治体と呼ばれる本部（ニューヨーク）の指導者を頂点とするヒエラルキーに基づく。

バプテスマを受けることで正式なメンバーシップを得る。バプテスマを受けるには、教理の理解度を確認するテストに合格する必要がある。バプテスマを受ける前は、教理を学ぶ「研究生」と呼ばれるが、受けた後は教理を伝える「エホバの証人」と呼ばれる。

信者の自由な脱会を妨げる要素としては、「ハルマゲドン」に関する教理がある。簡単にいえば、伝道や集会に欠かさず出る、輸血を拒否するなど、正しいエホバの証人として行為しないと、「ハルマゲドンが来たときに滅ぼされる」というものである。また、ハルマゲドンが来る前に正しい行為をしなかった場合、「霊性が低い」とされ、ハルマゲドンの後に樂園で生き残る可能性が低くなるばかりでなく、会衆内から非難される可能性が高い。また、教団を批判して脱会したエホバの証人は、たとえ親きょうだいであっても、「背教者」として認識され、話をすることも否定される。これらの特徴は、**教団から離れることを困難にする**。

3. 脱会カウンセリング経験者の脱会

3.1 脱会カウンセリング経験者が脱会する要因とそのプロセス

脱会カウンセリング経験者が脱会する要因は、脱会カウンセリングを受けたことである。それまでは「協会」の活動や組織に明確な否定的感情を持っていなかった事例が多い(15名中13名)。脱会カウンセリングは、当該教団について詳しい知識を持っている牧師や脱会カウンセラーが信者に脱会を促す援助を行う活動である。多くの場合は信者の家族が主体となり、信者に脱会させることを目的として行われる(15名中13名)。「協会」に入ったことで信者が非信者の家族と軋轢を起こす場合があることが、その背景にある。信者は牧師や家族からの説得を受けるが、このとき、特別に設けられた部屋で集中的に説得される場合が多い(15名中12名)。

脱会カウンセリングの場面では、信者に対して「協会」の教理の問題点を示し、教理や組織が信ずるに値しないことを説明する。本研究の協力者15名もこれらの情報を知ることで認知的に教団から離脱し、組織的活動から離れることに納得している。納得する前後で元信者と話す機会が設けられることがある。元信者が「協会」を辞めた後も元気に生活している姿を見ることは、自分が脱会した後のモデルとなり、脱会の方向に傾きかけた気持ちを支持する役割を果たしている。

脱会カウンセリングによる脱会は、その性質上、一般的に「教団外の情報」の提供による「認知的離脱」の後、「教団外の人間関係」を通じて「組織的離脱」に向かうというプロセスをたどる。

3.2 脱会カウンセリング経験者の脱会後の状況

Lewis and Bromley[1987]は、脱会者の「脱会」後の精神的疾患の要因が脱会カウンセリングの方法の中にあると指摘する。脱会カウンセリングを受け入れることは急激な改宗を求められることを意味するため、受けた当人は一時的に精神的混乱に陥りがちである。また、失敗した場合、家族関係が崩壊する可能性もあり、このような脱会方法に問題がないとはいえない。

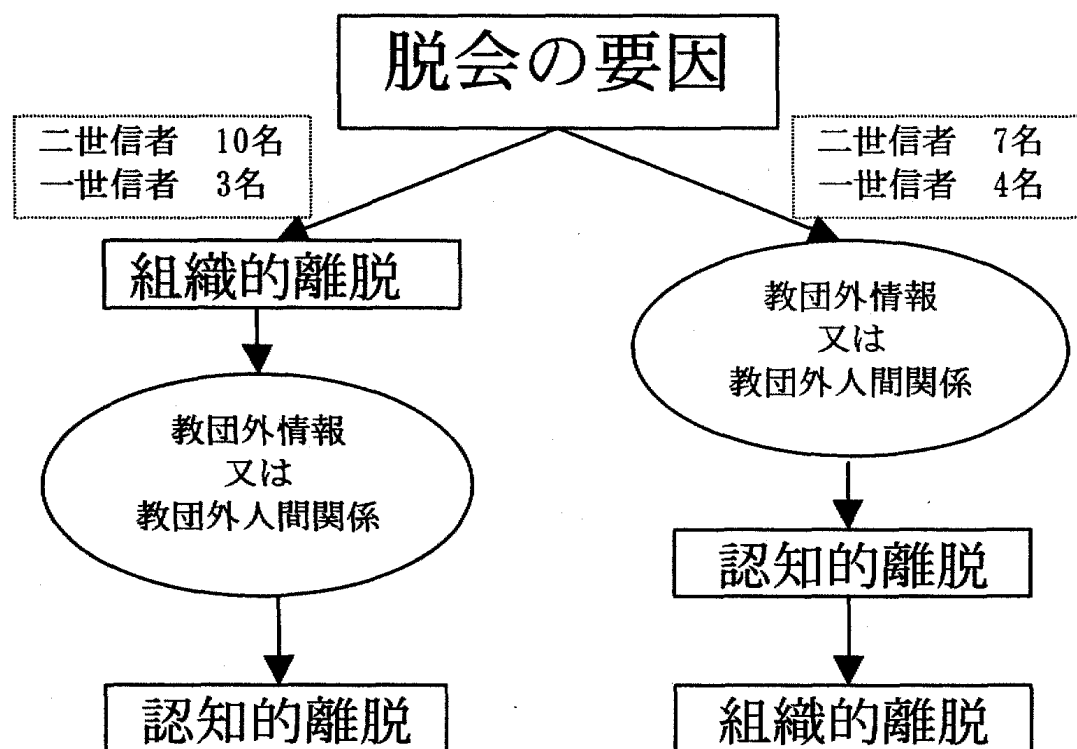
しかし、成功した場合、本人を取り巻く脱会後の環境という点では、脱会カウンセリングには比較的問題が少ないといえる。その理由は、脱会カ

ウンセリングを行なった家族や脱会カウンセラー、およびその関係者である元信者たちの存在があるからである。脱会を後押しする要因は、脱会後の環境を整えるためにも役に立つ。また、脱会カウンセリング経験者は脱会后、新たにキリスト教の信仰を持つ事例が多い(15名)⁽⁵⁾。脱会した事実を肯定的に評価してくれる人間関係があることは、脱会した状態を精神的にも社会的にも安定させる⁽⁶⁾。

4. 自発的脱会者の脱会と脱会後の状況の事例分析― 一世信者と二世信者

4.1 自発的脱会者についての分析 (図を参照)

ここでは、自発的脱会者を一世信者と二世信者に分け、それぞれの脱会前後の状況の相違について分析する。提示した概念図では、認知的離脱に至るには、何らかの形で教団外からの情報の提供あるいは教団外の人間関係の形成が必要なことを示した(詳細は以下の節参照)。今回の事例では、組織的離脱が先行する事例の割合に関して一世信者と二世信者で大きな差が見られなかった⁽⁷⁾。



図：自発的脱会者の脱会プロセス概念図

4.2 一世信者である自発的脱会者の脱会の要因とそのプロセス

一世信者の自発的脱会者は7名である。彼らの脱会の要因は多様であり、複数の要因を持つ事例が多い。あえて主要因を取り上げると、会衆内の人間関係の難しさから組織に疑いを持った事例が5名、子どもに対する教理の厳しさに疑問を抱いた事例が1名、知人から組織の問題点を教えられた事例が1名である。

認知的離脱が先行した事例(4名)をもとに脱会プロセスをモデル化してみる⁽⁸⁾。

会衆内で、ある姉妹と口論になった。問題を解決するために長老に相談したが、長老は自分の意見をまったく聞かず、その姉妹の言い分だけを取り上げた。公平な組織といわれているのに、実際には行われていないことにショックを受けたが、人間には過ちがあると思い、活動を続けていた。しかし、会衆内を良く見ると同様なことが頻繁に起こっている。悩んだ末、勇気を振り絞って「協会」の問題点について書いてある書物を読んできた(教団外情報の入手)。様々な問題が指摘されており、納得の行く部分が多かったので、やはりこの組織から離れるしかないと決めた(認知的離脱)。組織から離れるにあたって、脱会カウンセリング活動をしている牧師と連絡を取り、元信者を紹介してもらって(教団外人間関係の形成)、脱会の決意は固まった(組織的離脱)。

脱会するには様々な要因があり、認知的離脱を促すきっかけも人それぞれであるが、基本的なプロセスは以上のようなものである。実は、信者にとって組織的離脱をする前に「協会」批判の本を読むことや牧師と連絡をとることは「背教」行為に当たり、非常に抵抗がある。ある女性は「電話を一度かけようとしたが、手が震えて切ってしまった。半年後にやっとの思いで再びかけることができた」という。したがって、そのような情報を手に入れずに組織的脱会が先に生じる事例もある(3名)。事例のうち2名は、精神的混乱が生じたために急激に離脱をした。時間を経て精神的に落ち着いた後、知り合いから脱会カウンセラーを紹介されたり(教団外の人間

関係形成)、自ら本を手にとって読んだり、インターネット情報を手に入れたり(教団外情報の入手)したことで、認知的に離脱するに至っている。

4.3 二世信者である自発的脱会者の脱会の要因とそのプロセス

二世信者の自発的脱会者(17名)の脱会の要因も多様であり、複数の要因を持つ事例が多い。主要因は、組織の教理や行動様式に適応が困難になった事例8名、組織内の人間関係に疑問を持った事例5名、知人から「協会」の問題を指摘された事例2名、インターネットの「協会」の情報で疑いを持った事例2名であった。

組織的離脱が先行した事例(10名)をもとに脱会プロセスをモデル化してみる。

子どもの頃に母親がエホバの証人になり、集会や伝道に連れて行かれた。教理によって役員選挙や騎馬戦などへの参加が許されず、そのたびに学校の先生に説明しなければならなかった。同級生からは好奇の目でみられることも少なくなかった。中学校の頃から集会や伝道が苦痛になり、ハルマゲドンで滅ぼされてしまうかもしれないと思いながらも、次第に活動しなくなった。母親からは責められ、自分も活動しないことに罪悪感があった。ある時、こんな風に悩むのも全部「協会」のせいだと思い、すべての活動をやめた(組織的離脱)。しかし、その後も罪悪感やハルマゲドンの恐怖は残った。しかし、インターネットでエホバの証人のサイトを見つけ(教団外情報の入手)、自分と同じような人々がいるということを知り、その人々との交流を通して(教団外人間関係の形成)自分だけが特殊でなかったということがわかって気が楽になり、「協会」の教理にこだわることはないと思うことができた(認知的離脱)。

個別の事例を見ていくと、10名それぞれが多様な経過をたどっており、一概にはまとめることはできない。けれども、認知的離脱が先に起こった事例を含めて二世信者の多くが、男女差はあるが、学校生活と会衆や家庭での生活という二重生活に苦しんだことを報告している⁽⁹⁾。教団の教理と

一般社会の価値観との間で板ばさみになるのである。精神的負担に耐え切れずに組織的離脱をする二世信者は少なくない。認知的離脱が先に起こった事例7名は、組織内にいるときに教団内の人間関係に疑問を持つなどして、自ら教団外の情報を入手した上で組織的離脱をした事例である。この場合は、インターネットや知人などを通じて、元信者との交流(教団外人間関係の形成)を持つことが可能となっている(6名)⁽¹⁰⁾。

4.4 一世信者である自発的脱会者の脱会後の状況

まず、認知的離脱と組織的離脱の先後関係がもたらす影響について検討する。自発的脱会者は離脱の際に自己否定感、罪悪感を持つが、一世信者は「自ら一生のものと選んだ信仰をあっさり手放してしまうなんて自分はいい加減だ」あるいは「ここまで信じてやってきたのに放り出せない」など自分の選択の結果がうまくいかなかったという認識に基づいてこのような意識を持つに至っている(7名中5名)。特に、組織的離脱が先に起こった事例3名については、教団外の情報や人間関係の支援を得て認知的離脱に至るまでの間、このような罪悪感から精神的に不安定な時期を過ごしている。組織的離脱が先に生じたある女性は「わたしはヤギ(ハルマゲドンで滅ぼされる人間)だ」と思って絶望的な気持ちになったと述べ、ある男性は認知的離脱にいたるまでの数年間「ずっとむなしさを感じていた」と述べる。

認知的離脱が先に起こった場合は、組織的離脱に向かうことは比較的容易であり、脱会にかかる時間や困難が減少するようである。教会に所属していないでいると不安感があると述べた事例はあったが、脱会自体を否定的には見ている事例はない。

一世信者の自発的脱会者は脱会後にキリスト教信仰を持つ事例が多かった(7名中5名)。信仰を持つことは、教団外から新たな「世界観」を採用すること、新しい信者仲間という人間関係を得ることを意味する。したがって、新しい信仰は脱会後の「社会的リアリティの再定義」を促す機能を持つ。ある男性は「信者のとき伝道などをした責任を果たすためにもキリスト教の牧師になりたい」と語る。

また、脱会カウンセリングに関連した活動に参加経験を持つ事例は6名であり、一世信者にとって有効な情報源となっている。認知的離脱が先に

起こった事例では、3名が脱会カウンセリング関係者から情報を得ており、組織的離脱が先に起こった事例3名も認知的離脱を自主的に進めるために情報提供や人的サポートを受けている。残り1名はインターネットを通して情報や元信者仲間との交流を得ていた。

「協会」のバプテスマを受けた事例(6名)と受けなかった事例(1名)では、離脱への抵抗感が異なる。離脱の前後に精神的疾患の兆候が見られた事例は7名中2名であり、この二人はバプテスマを受けている。また、残りのバプテスマを受けている事例4名のうち、2名は脱会後も精神的に不安定な時期を経験している。これに対し、バプテスマを受けていない事例は、疑問を持ってから比較的抵抗なくインターネットを通して情報を得て脱会しており、その後大きな精神的混乱はないようである。

本稿の事例では、家族内に「協会」信者がいる一世の自発的脱会者はいなかった。

4.5 二世信者である自発的脱会者の脱会後の状況

認知的離脱と組織的離脱の先後関係がもたらす影響については、二世信者の場合も、組織的離脱が先に生じた事例(10名)の方が、認知的離脱に至るまでに多くの時間と精神力を必要とし、多くの困難を経験している。その程度は一世信者よりも重くなる傾向がある。安定した認知的離脱の段階に至るまでに10年以上の時間を要した事例が複数あった。時間は短くとも組織的離脱が先に起こった事例は、その後、認知的離脱に必要な情報を得るまでに困難がある。例えば、一度組織的離脱をしてから成人後に再び組織活動に戻った経験を持つ事例が3例あった。内2名は女性で、結婚後に受けたエホバの証人による伝道(家庭訪問)が組織活動再開のきっかけとなっている。

ところで、二世信者は自分の選択ではなく当たり前環境として「協会」の教理を教えられている。そのため、一世信者よりもハルマゲドンで滅ぼされるなどの教理に基づいた恐怖や罪悪感、正しいエホバの証人になれなかったことによる自己否定感が強いという傾向がある。組織的離脱が先に生じた事例で、認知的離脱が十分に果たされていない期間にこの傾向が強い。たとえば、ある男性は次のように述べる。

組織にいる自分が嫌で、フェードアウトという感じでやめたが、組織を辞めると自分の価値がなくなるように感じた。音楽に打ち込んで失われた自分自身の価値を埋めようとしていたが、いつかは戻ることになるかとも思っていた。

認知的離脱が先に生じた事例でも、十分でない場合などは、「協会」の教理の影響が戻る場合も見られる。たとえば、後の連絡ではあまり「協会」のことを思い出さなくなったと報告してくれた男性は、インタビュー時には、次のように述べていた。

調査の依頼を受けた時には、もうエホバの証人の束縛から解放されたという自信があったが、その後やはりその教理の価値観の中でものを考えていると気がついた。いまはやっぱり組織に戻ったほうがいいんじゃないかと不安を感じる。

教団外の情報や人間関係を得る手段として、インターネットが二世信者にとって大きな役割を持つことに注目したい。この点は若い世代の二世信者に顕著であるが、40歳代の二世信者にとっても組織的離脱後の認知的離脱に到達するための手段として重要な役割を持っていた。インターネットは脱会に必要な教団外の情報源であるだけでなく、二世信者にとっては、教団外の人間関係の形成が可能な道具であることがより重要である。警戒心の強い初期のころには匿名的に掲示板などで交流することができ、より深く親しくなりたいければメーリングリストへの参加や一対一のメール交換、オフ会（直接対面）への参加が可能である。20年ほど前に組織的離脱をし、度重なる転職など様々な経験を経て自分なりに「社会的リアリティの再定義」をし、認知的離脱をしたと思っていた男性は次のように語る。

二世信者に会うまでね、エホバの証人、何が何でも叩きつぶさなければならぬ敵だと思ってた。でもある二世と会って話すうちに本質が色々見えてきて、俺の場合は親の問題だって見えてきた。それが見えてきてだいぶ落ち着いた。同じ経験をした人が集まってお互いの経験を話すことで、自分だけじゃなかったって、

悩みの治療効果があるみたいね。

二世信者との情報交換、交流を行うことは、認知的離脱を促進する効果を持っている。組織的離脱後数十年経ってからインターネットを通じて二世信者に出会った女性は、「今の若い人は、自分が何年もかけて行なったこと（つまり認知的離脱）をネットでやって、二、三ヶ月で元気になっていく。うらやましい」と述べる。

一方で、脱会後にキリスト教信仰を持つことは、二世信者にとっては「社会的リアリティの再定義」に対する効果が薄い(17名中1名)。むしろ「もう宗教はこりごり」と語る人々がほとんどである。脱会カウンセリング活動へ参加している事例も、二世信者では17名中6名である。脱会カウンセリング活動で出会える元信者は一世信者が中心であり、二世信者にとっては得るものが少ないのかもしれない。また、二世信者にとっては一世信者よりも「協会」批判の本に対する抵抗が大きいという傾向もある。これに対して、元二世信者との交流というネットで得られる情報交換は、接触への抵抗感が低い。そこから得られる元二世信者との教団外の人間関係の形成は、より重要な役割を果たしている。

人間関係の問題については、二世信者は家族内に「協会」信者がいる事例が多く(17名中12名)、家族信者との関係は脱会後の状況にも大きな影響を与える。

(高校生の頃に組織的離脱をした時について)でもね、(母親が)どんなに悲しむだろうなっていうのがあったから、完全には離れられなかった。(結婚後再び活動を開始するが、インターネットで教団外情報を得たことをきっかけに組織を)客観的に見られたのはいいんだけど、まだ揺れている部分があって。身近にいるエホバの証人の人はすごい親切で、信仰も高いから否定できない。その人たちを否定すると母も否定しなきゃいけないし、自分自身も否定しなきゃいけないみたいになっちゃって(組織を離れるかどうか迷った)。

家族信者の存在は、二世信者にとって、脱会することを否定的に解釈さ

せ、脱会すること自体を思いとどまらせる効果を持っている。また、本人が「協会」を否定的に見るようになっても家族が信者にいる場合、脱会の意志を公にすることが困難である。公にした場合は、家族信者との交流が円滑に行えなくなる場合が多くなるからである。

バプテスマを受けた事例と受けなかった事例とでは、二世信者でも、受けた事例のほうが困難は大きい。しかし、二世信者の場合は、バプテスマを受けていない事例でも「協会」の教理や行動様式から受けた影響は大きく、程度の差はあるが精神的疾患の兆候がみられる事例が一世信者よりも多いのではないかとと思われる(17名中13名)。また、それと無関係ではないが、脱会後に社会的にも困難を抱える事例が多い(仕事や学歴上大きな困難を経験した事例17名中13名。残り4名も何らかの困難を抱えている)。内容としては「大学進学が否定されているため、高校(中学)までしか行けなかった」あるいは「大学進学のコストを自分で稼いだ」、「(精神的理由から)仕事が長続きせず、転職を繰り返した」、「職場での人間関係がうまくいかない」などである。

5. 考察

5.1 調査対象者の属性にみられる偏り—教団の伝道形態・教理との関係

本研究の事例となった脱会カウンセリング経験者には既婚女性が多く、自発的脱会者でインターネットを通じて得られた対象者には20、30歳代の二世信者の男性が多い。脱会カウンセリングの対象となる人々の大半が既婚女性であるが、これは「協会」の伝道の仕方に関係している。昼間の家庭訪問による伝道では主に主婦が対象となる。一世信者は既婚女性である可能性が高いのである。

二世信者については主にインターネットを通じて紹介を得たため、ネットに親しみのある若い世代の事例が多く得られたと考えられる。ネット利用者の元信者の男女比は不明であり、男性が多かった理由は今回の事例からはわからない。「協会」では男性には「頭の権威」として主導権をもつように指導し、女性には男性に従うよう指導するなど性別役割が明確である。また、女性の二世信者の事例で、いったん離れたものの結婚後伝道を

受けたことで組織活動を再開したという事例がある。「協会」のジェンダーが二世信者に与える影響についての研究の必要性を示す知見であるといえるだろう。

5.2 一世信者と二世信者の相違点

組織的離脱が先に生じた場合、脱会前後に持つ自己否定感・罪悪感が重くなる傾向があった。特に二世信者にその傾向が顕著である。二世信者の多くが持っている教理を基準とした自己否定感は、教理を認知的に否定しないかぎり解消できない。そのため組織的離脱後の認知的離脱、「社会的リアリティの再定義」は困難となる。また、二世信者の場合、認知的離脱が先に生じた場合にも自己否定感が見られる。

二世信者にとって、「社会的リアリティの再定義」をさらに困難にするのが、家族信者の存在である(母親が多い)。脱会を家族から非難されるため、自分の脱会を肯定的に受け入れる「社会的リアリティの再定義」に至ることが困難である。一世信者は家族信者がいる場合が少ないためか、この問題に直面する人は少ない⁽¹¹⁾。

認知的離脱や「社会的リアリティの再定義」に必要とされる教団外情報、教団外人間関係の性質が、一世信者と二世信者では異なることが事例分析から示された。一世信者の場合は、他のキリスト教信仰や脱会カウンセリング関係者による「協会」批判の書やそこで得られる元一世信者との交流を、認知的離脱や「社会的リアリティの再定義」の助けとすることが比較的容易である。それに対し、二世信者の場合は、「協会」を否定することは幼少の頃からの自分の基盤を否定することにもなりかねないため、それらに対する抵抗感は強い。それよりも、自分と同様の体験を共有できる情報交換の場、交流を持つことが認知的離脱や「社会的リアリティの再定義」に至るために重要となっている。

6. 結論と今後の課題

以上の分析と考察から、組織的離脱よりも認知的離脱が先に生じた場合の方が、脱会のプロセスや「社会的リアリティの再定義」が比較的スムーズに行われるということが示された。認知的離脱や「社会的リアリティの

再定義」には、教団外からの情報の提供や人間関係の形成が不可欠であることも確認された。重要な知見は、一世信者と二世信者とでは必要とされる情報の性質、人間関係の性質が異なっているということである。一世信者とは異なる背景を持つ脱会者として、二世信者の脱会の問題が取り上げられる必要性を結論として指摘したい。

本稿はものみの塔聖書冊子協会という特殊な教団からの、しかも限定された手段で得られた脱会者の事例のみを対象とした研究であり、知見はこの範囲を出るものではない。今後は、信者が脱会する上で困難や抵抗が生じやすい特徴を持つ他の教団との比較研究、あるいは脱会する上で比較的困難・抵抗が少ない教団における脱会についてなど、他教団との比較を行うことが必要である。また、幅広い形で脱会者の事例を集めていくことで、脱会という現象の一般的議論を作り上げていく必要がある。また、本稿は脱会者個人の問題にひきつけて議論した側面が強いため、今後は組織の構造や教理の内容など、教団組織の問題から脱会の要因やプロセスを位置づけていく必要もある。

二世信者の問題についても、本稿では研究として取り上げていく必要性を指摘するにとどまり、その内容の詳細な分析までには踏み込めなかった。この点は、さらにより詳細な分析を行う必要がある。脱会についての研究には多くの課題が残されているが、問題の解明に近づけるよう、今後多くの研究や批判が待たれる。

(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員)

付記：本稿執筆にあたり、「宗教と社会」学会第9回学術大会での発表の際、多くの方から貴重なコメントを頂いた。また、査読者の方から有益なコメントをいただいた。記して、謝意を表したい。本稿は、平成13年度科学研究費補助金(日本学術振興会特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

註

- (1) 80年代以降、新宗教運動が衰退し、多くの脱会者が出るようになったため80年代に脱会研究が増えたとする見解もあるが、全体的には入信の問題ほどには注意は多く払われていない[Wright and Ebaugh 1993:118]。
- (2) 厳密にはメンバーシップを取得した人に対して「脱会」という用語を適

用すべきである。しかし、「協会」の二世信者は正式なメンバーシップを取得してなくとも教団から大きな影響を受けていることが多いため、正式なメンバーシップを脱会前の条件とはしなかった。

- (3) 入信プロセス理論の発展に寄与したロフランドースタークモデル [Lofrand and Stark, 1965: 864-874] は、脱会プロセスモデルにも影響を与えている。このモデルは7つの条件の有無によって入信するか否かが決まるとするモデルである。この中で教団内の人間関係の形成に関係する条件がその後の研究で支持されている。
- (4) この問題を緩和する方法としては、脱会したばかりの脱会者を対象にして、同一人物の語りの変化について時間的経過を追って分析するなどが考えられる。
- (5) 分析に含めなかったが、脱会カウンセリング後もキリスト教信仰を持っていない人もいた。脱会カウンセリング経験者が全員キリスト教信仰を持つわけではない。
- (6) 脱会カウンセリング経験者のなかで1名、家族信者を持つ事例があった。この事例では脱会後、その家族とは一切会うことができない状態にあるという。
- (7) 事例数が少ないことと、事例をインターネットからの紹介で得たことに影響されていると思われる。対象の性質上すべての脱会者を網羅的に事例として得ることは難しい。組織的離脱から何十年間も元信者との交流をもてなかった二世信者の事例もあり、元信者との交流の手段を持たない自発的脱会者は数多くいると予測される。これらの人々についても何らかの形で調査研究されるべきである。
- (8) 協力者の中には、家族信者を持つ人も多い。本稿のような研究に協力をしたことが家族信者に知られた場合は、家族の縁を切られる可能性もあるため、事例提示の際、個人を特定するような詳細な表現は極力避けるように注意して記述する。
- (9) 格技は男子のみの科目であることが多く、女性には格技拒否問題は生じにくい。
- (10) 残りの1名は、会衆内の二世信者仲間とともに脱会した事例である。
- (11) 子を持つ既婚女性の元信者は、脱会する時に子どもと一緒に辞める場合が多い。この際、自分の意思で辞めた場合とは異なった二世信者問題が生じ

ると予想される。

参考文献

秋本弘毅 1998『エホバの証人の子どもたち』わらび書房。

Jacobs, Janet L. 1989, *Divine Disenchantment : Deconverting from New Religions*, Indiana Univ. Press.

Lewis and Bromley 1987 "The Cult Withdrawal Syndrome : A Case of Misattribution of Cause?" *Journal of the Scientific Study of Religion* 26(4): 508-522.

Lofland and Stark 1965 "Becoming a World-Saver: A Theory of Conversion to a Deviant Perspective." *American Sociological Review* 30:862-75.

Rothbaum, S. 1988 "Between Two Worlds: Issues of Separation and Identity after Leaving a Religious Community." in David Blomley (ed), *Falling from the Faith : causes and consequences of religious apostasy*, SAGE Publication.

Solomon, T. 1981 "Integrating the "Moonie" Experience: A Study of Ex-members of the Unification Church." In T. Robbins and D. Anthony (eds.), *In Gods We Trust: New Patterns of Religious Pluralism in America*. New Branwick, N.J. Transaction.

Wright, S.A. 1984 "Post-involvement Attitudes of Voluntary Defections from New Religious Movements." *Journal for the Scientific Study of Religion* 23(2): 292-98.

Wright, S.A. and Ebaugh, H.R. 1993 "Leaving new religions." *Religion and the Social Order*, Volume 3B: 117-138.